



*この特集を読んで、同じ立場にある保護者の方の記事に共感することが多くありました。

「第二のおうち」とありますが、本当にその通りだと改めて思いますし、こつぶっこクラブは子どもにとって親にとっても安心、成長できる場所となっています。

このように感じられるのは、こつぶっこクラブも学校との連携を取られているからなのかと振り返ります。入学当初、下校の際は集団で学童へ移動する連携がありましたし、学校行事の際は学校で学童の先生の姿をお見かけすることがありました。

学童保育の先生は子どもの成長を促し、見守りもしてくださって、それを親にもたくさん教えてくださいました。この一年で息子の成長を感じますし、親もたくさんの気づきから子どもへの関わり方や促し方などたくさんの学びがありました。こつぶっこクラブ保護者

*今回、2024年1月号の特集「学校と学童保育」を拝読し、それぞれの地域で、学校と学童、そして保護者のそれぞれが、様々に工夫して連携しながら、子どもたちの成長と発達を見守っている様子に、我が家の今までの子育ての形を重ねておりました。

今は小学3年生の次女だけが世話になっていますが、かつては現在中学生の長女と長男も学童を利用していました。長女には知的障害と自閉症が、長男にも自閉症とADHDがあったことから、学童では、我が子たちがどんな様子で過ごしていたのか、指導員の先生方は、日々の姿をよく観察してくださり、都度教えて下さいました。親としても、特性ある我が子たちの子育てが日々手探り状態だったので、指導員の先生方と話しているときに、「ともに」我が子たちの「育ちを見守って」いる、そんな貴重な時間だったと思います。また、学童での様子を学校の先生方にもお伝えすることで、先生方にも様々な気づきが生まれたようで、我が家なりの、学校、学童、そして家庭の3者間での育ちの見守りの形は、こうして生まれていったように思います。改めて、学童の指導員の先生方には、普段から子どもたちを広い心で見守り育てて下さり、感謝と尊敬の思いでいっぱいです。

こつぶっこクラブ 直居麻衣子

*特集「学校と学童保育」の中で、学校の担任の先生にある男の子が『わからないことや困ったことや待つてほしいという時に先生が待つてくれた嬉しかったです。』と伝えている文がありました。大人も子どもも時間に追われる日々で待つてもらえないことや困っている気持ちを言えないということは子どもたちにとって、自分の気持ちを表現するチャンスを失っているのではないかと改めて感じました。大人が自分の器を広げ子どもたちのどんなことでも受け入れる余裕が持てると子ども自身がどんな自分も表現できるのだと子育ての気づきにもりました。娘が通っている学童保育には、父母会があり子どもたちの様子を先生と話す機会があります。その中で、町内を鬼ごっこしたいという子どもたちの思いが実現したとのお話がありました。いろいろなことが制限されている時代に子どもたちの思いに寄り添って下さった先生方に感謝致します。子どもたちにはとても大切な体験だったのではと感じます。認めてもらえたという経験の積み重ねが子ども自身、自分が成長していると実感できるのではないかと思います。『子どもをまんやかに』と考えて下さる学童保育の暖かさを日々感じています。

こつぶっこクラブ 岡田晃子



* 1989年に開所して以来、子どもをまんやかに据え必要な時に小学校との協力や連携を大切にしてきました。友達関係やその他、こつぶっこクラブで困っている子どもは学校でも困っていると考え、子どもの為にと校長先生や担任と話し合いをお願いしてきました。

春には「子どもの名簿」を学校に届け、こつぶこの行事案内チラシの配布などもお願いしています。学校からは月の計画や時間割などのお知らせを頂き、支援員も出来る限り授業参観や学校行事に参加をし、子どもの様子を見守り子どもの理解に努めています。

改めて、家庭、学校、地域における協力や連携の大切さを感じました。しかしそのことが子どもを指導するためのものになってはいけなと感じています。これからも子どもの為に家庭、学校、地域とよりよい連携ができる様、支援員で話し合っていきたいと思います。

こつぶっこクラブ支援員

三浦啓子

